

メルキゼデク—その人物と役割 (ヘブル 7:1-3)

1. このメルキゼデクは、サレムの王で、すぐれて高い神の祭司でしたが、アブラハムが王たちを打ち破って帰るのを出迎えて祝福しました。またアブラハムは彼に、すべての勝利品の十分の一を分けました。まず彼は、その名を訳すと義の王であり、次に、サレムの王、すなわち平和の王です。父もなく、母もなく、系図もなく、その生涯の初めもなく、いのちの終わりもなく、神の子に似た者とされ、いつまでも祭司としてとどまっているのです。(7:1-3)
 - a. メルキゼデクとは誰なのか。ヘブル書の著者はなぜ1章まるごと使ってメルキゼデクの記述をしているのか。聖書の中でメルキゼデクについての記事はほんのわずかしかなかく、彼についてはほとんど知られていない。彼は創世記 14:18、そして詩篇 110 篇に登場する。彼がどのような人物だったのかということはさまざまな見解があり、ある人は受肉前のイエスが姿を現された (theopany=神の顕現) のだ、ある人はノアの息子セムのことだ、またある人は神の子のような存在だったのだ、と言う。あるいはメルキゼデクとはアブラハムとは関係なく、ただ単に神に選ばれ神と共に歩んだ人物であったのかもしれない。
 - b. いずれにしてもこれらはすべて憶測に過ぎない。彼についてわかっていることは、1) サレム(=「平和」の意味)の王であった。 2) メルキゼデクという名はおそらく彼の個人名というよりは称号であった。メルキ=王、ゼデク=義という意味である。 3) アロン系祭司職に重要とされた系図がない。したがって彼はアロン系祭司職には属していない祭司であった。 4) 聖書に出てくる最初の王であり祭司でもある人物であった。 5) アブラハムは戦利品の十分の一を彼にささげ、彼はアブラハムを祝福しているので、アブラハムよりも高い位にあった。
 - c. ヘブル書の著者がここでメルキゼデクを取り上げているのは、イエスもまたアロン系祭司職には属していなかったからである。レビ族出身のアロン系祭司職は古い契約のために立てられていたが、イエスはレビ族出身でもなく、イエスの祭司としての役割はそれとは異なっていた。イエスの祭司としての役目はメルキゼデクと並ぶもので系図は関係なく、また古い契約のためでもなかった。メルキゼデクのミニストリーがアロンよりも優れていたように、新しい契約は古い契約よりもはるかに優れていた。
 - d. イエスは様々な制限のあるレビ系祭司よりも優れており、私たちはイエスが必ずとりなしてくださるという確信を持つことができる。レビ的祭司制度には様々な制約があったがイエスにはリミットがない。
 - e. イエスはメルキゼデクの位に等しい大祭司であるが、それだけではなく先駆け (ヘブル 6:20) とも呼ばれる。私たちもイエスの弟子としてイエスに従う決心をすると、キリストと同じくメルキゼデクと並ぶ大祭司となるように召されるのである。私たちに対する天からの召しは、ただこの世で正しい生き方をして天に行く、というだけでなく、イエスが歩まれた軌跡をたどり、平和の御国を代表する義の王となることである。